

テキストを読む手がかりとしての注

犬塚 元 (法政大学法学部、政治学史・政治思想史)

報告要旨

学史・思想史研究では、複数のテキスト（ないしは思想・学説や思想家）をさまざまなかたちで関連付けることが必要になるが、複数のテキスト間の影響関係をどのような手法で検証するか、テキスト間の影響関係を論証するための必要十分条件はなにかについては、いまだ確定的な方法論的解答が示されているわけではない。

テキストAに影響を与えたテキストを探るためのもっともシンプルな手法は、テキストAが直接的・明示的に言及するテキストに注目する手法であり、とりわけ、テキストAに含まれる典拠注（先行テキストを引用・言及する注）に注目する手法である。もとより、学史・思想史研究において、典拠注に注目すること自体はまったく珍しくはないが、ほとんどの場合は、テキストのなかの特定の典拠注に注目するだけであり、あるテキストのなかの典拠注の全体を直接の分析対象とする研究はほとんど見られない。

しかし、近年の政治学分野における学史・思想史研究では、酒井大輔のいくつかの日本語・英語論文に見られるように、計量書誌学の知見や手法を応用し、「引用分析」(Citation Analysis)の手法に即して、量的データにもとづいて引用パターンやその変化を導出し、それを通じて学史・思想史の一側面を論証する研究が登場している。（「引用分析」における「引用」とは、他の文献のある部分を抜粋することではなく、ほかの文献に言及することを意味する。）

そうした「引用分析」の手法にもとづいて、デイヴィッド・ヒューム（1711-1776）の長大な歴史叙述『イングランド史』を分析してみると、『イングランド史』の典拠注や歴史叙述の方法にかかる特徴を明らかにすることができる（Susato and Inuzuka 2025）。

とりわけ興味深いのは、計量テキスト分析の「キーワード分析」の手法を応用して、ジャカード係数を測定する手法によって、『イングランド史』の各パートの「キーテキスト」（それぞれのパートにおいて特徴的に言及されるテキスト）を解明した分析結果である。

『イングランド史』のなかの、内戦前（ジェイムズ1世治世）についての歴史叙述では、ヒュームが歴史コレクション（過去の歴史文書のレポジトリ文書）を顕著に活用した傾向が観察される。他方で、内戦期についての歴史叙述では、政治対立に関与した政治アクターたちがそれぞれの立場から執筆した同時代史（いわゆる「トゥキュディデスの歴史」）を比較対照する手法をヒュームが積極的に用いたことが観察された。これは、歴史叙述の不偏性 (impartiality) を標榜したヒュームが、さまざまな歴史叙述の手法を使い分けて不偏性を担保しようとしていたということの意味している。

『イングランド史』の典拠注を悉皆調査し、量的データと質的分析を組み合わせると、そこから『イングランド史』というテキストの方法や内容のいくつかの側面を

明らかにすることが可能であった。注は、学史・思想史研究の対象となるテキストのなかに含まれる重要情報源であり、さらなる有効活用やそのための分析手法のさらなる開拓が求められる。計量テキスト分析のいまのオーソドックスな手法は、テキストを形態素に分解して統計処理する手法であるが、注は、それとは異なった手法の定量的分析を可能にするテキストのパーツでもあり、方法論的にも興味深い挑戦をもたらすことが期待できる。

報告のなかの言及文献

Hume, David 1778, *The history of England from the invasion of Julius Cæsar to the Revolution in 1688*.

Susato, Ryu and Hajime Inuzuka 2025, 'Hume's Sceptical Enlightenment Approach to *The History of Great Britain*,' *Enlightenment Histories: The Helsinki Yearbook of Intellectual History* (forthcoming).

犬塚元 2023 「政治学史研究における一九五五年体制」『月刊みすず』728: 38-51.

酒井大輔 2017 「日本政治学史の二つの転換：政治学教科書の引用分析の試み」『年報政治学』68-2: 295-317.

酒井大輔 2021 「戦後政治学の諸潮流：計量書誌学的分析一九四五～一九八九」『政治思想研究』21: 291-319.

スキナー、クエンティン 1990 『思想史とはなにか：意味とコンテクスト』（半澤孝磨・加藤節編訳）岩波書店.